

トルコ語「観音経」写本の研究

付編 旧「素文珍藏」写本断片訳注

小 田 壽 典

はしがき

トルコ語本「観音経」は、いわゆる初期ウイグル仏典の出現に関する議論の対象となるテキストである¹⁾。正式には『妙法蓮華経』(T. 9, No. 262)の1章である「観世音菩薩普門品第二十五」は、鳩摩羅什(Kumārajīva)の漢訳經典であり、間違いなくトルコ語本はこれにもとづく。ラドロフ刊行[Radloff 1911]のウイグル写本は単行本として行われたが、トルコ語本『妙法蓮華経』が存在した可能性は高い。これまでに発表された写本断片は、「観音経」を除けば以下のものである。

- (i) 「提婆達多品第十二」：大谷探検隊収集体[橘 1913]
- (ii) 「薬王菩薩本事品第二十三」：ドイツ探検隊収集体[Zieme 1989b]
- (iii) 「陀羅尼品第二十六」：同上[Zieme 1989b]
- (iv) 「普賢菩薩勸発品第二十八」：同上[Maue-Röhrborn 1980]

ここに注目されることが2点ある。第一は、(ii)：出土記号なし(U 3542)、(iii)：出土記号 TID, TM 256(U 2376)、(iv)：出土記号 TID, TM 255のウイグル文字写本の3断片が筆跡、書法及び写本形式の観点から同一写本の部分であるとみられる。これはトルコ語本『妙法蓮華経』の存在に、けだし有力な証拠となる。第二は、上記写本に、濃厚なソグド的影響が指摘されることである。研究発表者の見解に従えば、トルコ語本はある知られないソグド語本に仲介されて漢訳原典にさかのぼる可能性があるという。第二の点に関して、必ずソグド語本の設定が必要であるかどうか、重要な課題となろう。さしあたり、トルコ語本「観音経」がトルコ語本『妙法蓮華経』の1章としてつくられたものかどうか、既刊のトルコ語「観音経」写本を再検討し、ついでに新たに同定された写本断片の訳注を付編とする。

1. 写本の発見と刊行

写本 A： 刊行者ラドロフによると、トゥルフアンで入手し、レニングラードにもたらされたジャコフ(Djakov)収集品のなかに、285cm × 27cm の卷子本があり、170行(行間隔 1.8cm, 各行長 24.7cm)からなっている。そして筆跡や紙質から同一写本とみられる 4 断片が見いだされ、巻首の破損部分を補うものとわかった。もっとも長いものは36行、他の二つは各 6 行、もう一つは 4 行であったという。ラドロフは空行の 2 行(第10, 17行)を加え、ウイグル文字の活字印刷によって復元を試み、全224行のテキストを発表した。写本はもともと226行ないし227行からなり、8箇所にわたり大小の破損があるけれども、現状は222行が残ったということである。この写本は、ウイグル活字本と巻末 6 行の写真(1a)とともに、ドイツ語の訳注を付けて刊行された[Radloff 1911]。

写本 B： 上述ラドロフの発刊と前後して、「ウイグリカ」第 2 巻に、ミュラーは 2 断片の写本(T. II Y. 10; T. II Y. 18)を発表した。その出土記号から、第 2 次ドイツ探検隊によって、トゥルフアン盆地のヤルホト遺跡から発見されたことがわかる。ウイグル文字写本断片の61行は、音訳とドイツ語の訳注が漢文原典と対照されている。図版はなく、黒筆とたいへん色あせた朱筆の跡をみとめること以外に外観の特徴は述べられていない[Müller 1910]。

写本 C： マインツ・アカデミー所蔵記号：Mainz No. 733 のウイグル写本断片も出土記号(T. II Y. 32, 39, 60)からヤルホトからもたらされたことがわかる。この61行(103cm × 30.5cm)からなる卷子本断片は、シナシ=テキンによって発表されている。比較的小さな文字のもっとも優美な書体例であるという。両側に黒線で引かれた欄のなかに、行罫を重ねて書写されている。断片の裏面のはじまりのところに、“*bo quansī-’im pusar bitigi ol*”〈これは観世音菩薩の書なり〉とあるという。このトルコ語方式の音訳テキストは、トルコ共和国トルコ語の訳注とともに、上述 2 写本との校異を注記するが、テキストの表記が標準化されているために、写本の書法をありのままに知ることができない。図版は未発表である[Ş. Tekin 1960]。

写本 D： 同じくシナシ=テキンによって、マインツ・アカデミー所蔵記号：No. 289 (T. II Y. 54-a)が発表されている。ウイグル写本断片11行(17cm × 16cm)は前後と左側

(行末)が欠ける[Ş. Tekin 1960](本稿第2章第2節参照)。

写本 E：大谷探検隊の橋瑞超がトゥルファンで入手した、ウイグル文字の貝葉型紙本一葉43行(6寸4分×1尺2寸3分=19.4cm×37.3cm)が図版とともに、羽田亨博士によって発表された[羽田亨 1958]。

写本 F：未発表の写本断片であるが、「回鶻寫経残卷，吐魯番出土，素文珍藏」と記されたものがある。3断片(18行：23cm×23.3cm, 20行：25.7cm×23.3cm, 46行：60.2cm×23.3cm)からなるが、接合面を考慮すると、合計78行になる。行間隔1.3cmで、行長20.4cmの両側に朱罫欄が引かれ、朱線の行罫に重ねて黒墨で文字が書写されている。付編、旧「素文珍藏」写本断片訳注を参照されたい。

2. テキストの復元

2.1. 写本 A が完本に近いことは、漢文原典との対照から最初にラドロフによって確かめられた。そして写本 C が写本 A の破損部分をよく補うことも、シナシ=テキンの証明したところである。以下に5箇所テキスト例を挙げて漢文原典との対応を示そう。

(1) 漢文原典の題記「妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五」に対して、写本 A の題記、さらにハミルトン [Hamilton 1986] 発表の敦煌写本(Or. 8212(122))の題記メモ²⁾とが対比される。

写本 A (2-3) : *quanši'im pusa alqud'in sīngar āt'öz körkin*

Or. 8212(122) : *quanši'im pusa alqud'in sīngar āt'öz körtkin*

〈観世音菩薩がすべての方面に身体の姿を〉

A : *körkitip tīnlylarqa asıγ tusu qılmaqı biš otuzunč*

8212(122) : *körtgürüp tīnlylar-qa asıγ* (以下写本破損)

〈現して衆生に利益すること、第二十五〉

この題記には「妙法蓮華経」に対応する訳語はなく、「観音経」の単行本を示唆するが、品数の明記は『妙法蓮華経』の一部であった証左ともなりうる。

(2) 「爾時無盡意菩薩即從座起，偏袒右肩合掌向佛而作是言，世尊觀世音菩薩，以何因緣名

観世音」の対応箇所がウイグル写本にもっとも欠損している部分である。写本 A の第 4 行から第 5 行の間にあたり、写本 C はわずか数語を補足するにすぎない。ただ常套的文脈であるから、他の経典写本を参考にすれば、少なくとも以下のような文章であった可能性はある。

[4]^{A4}: [ol ödün alqïnčsüz kögüz bodisvt olurmış] ornınta

[5] [örü turup : ong ägnintäki tonın birtin açınıp älgın]

[6] [qavšurup tngri burxaŋqa ĩnča tip ötüg ötünti : tngrim]

[7] [nä tıltayın]/^{C1}: ün äšidgüči tip atantı [är]ki : : ĩnča [uqung]

〈その時、無尽意菩薩は座席から起き上がって、右肩の衣を一方に開き、〉

〈手を合わせて天ブルハンにかように請うた。わが天よ、何のわけがあつ

〈て声を聞くもの、と名づけられたか。かように理解せよ。〉

以上の補充箇所はあくまでも類推によるものであるから、新たに欠損部分の写本が発見されたとき、修正されるべきものとする。

(3) 「佛告無盡意菩薩、善男子、若有無量百千萬億衆生受諸苦惱」に対して、

[8]^{A5}: (siz) tözün [üm nä üçün tip]/^{C2}: tisär äšidgäli ärklig

[9]^{A6}: tip titir bo yirtinčüdäki kim ämgäklig tınlıylar/^{C3}: atasar ol

[10]^{A7}: sav yoq kim kántü işidmäsär : anı üçün bo arya-

[11]^{A8/C4}: valokdišvr tip atanur : tavγačča quansı-ım titir : ĩnča

[12]^{A9}: tip yrlyqadı/^{C5}: tözünüm birök bo yirtinčüdä sansız

[13]^{A10}: tümän tınlıylar [üküş]/^{C6}: ämgänsär ol ämgäkintä

[14] quansı-ım pusaŋqa umuy ĩnay tutup [atın]/^{C7}: atasar

〈汝、善人よ、何ゆえといえ、聞くべき力ある、といわれる。〉

〈この世界における苦惱する人びとが称名すれば、その〉

〈言葉を自身聞かないものはないのだから、それゆえにこれ聖なる〉

〈アヴァロキテシュバルと名づけられる。唐語では「観世音」といわれる。〉

〈かように仰せられた。善人よ、もしこの世界において無数万の人びとが〉

〈観世音菩薩に帰依し、称名すれば、〉

ここではわずか数語を補充すれば、文章は完全である³⁾。

(4) 「聞是観世音菩薩、一心称名、観世音菩薩即時觀其音聲皆得解脱」

[15]^{C7}: bo bodisvt kántüni atamış üçün anta oq ašidür :

[16]^{A11}: ötrü ol/^{C8}: ämgäklärintä ara kirip qutyarur : ol qamay

[17]^{A12}: ämgäkliglär ämgäkintä antay qutrulur :

〈この菩薩は自身を称名したゆえに、そのとき聞きわけろ。〉

〈すなわち、その苦悩のなかにはいつて祝福する。そのすべての〉

〈苦しむものたちは苦悩から、ただちにすくわれる。〉

これ以下の写本 A の破損部分も写本 C によって補完されるが、その検証は省略する。写本 A と写本 C の間には書写の出入りがあり、数語の欠損箇所が残るが、同一系統の写本であることは疑いない。写本 A の行数はラドロフが推測したよりも数行多く、少なくとも 229 行に及んだと判断されよう。しかし写本 A の偈文の部分には相当の脱落があるとみなければならない。

(5) 「假使興害意，推落大火坑・・・衆生被困厄，無量苦逼身」(25 対句)

[189]^{A184}: yilvikip ayuqup ölürgäli saqınsar yänä ol oq qiltaçir-

[190]^{A185}: -qa tägir ayıy irinçyarly umuysuz inaysız ämgäklig

[191]^{A186}: ünlylar ögintä qangınta taqı yägräk adasınta

[192]^{A187}: tudasınta ara kirür ozyurur al çäviş bilgä bilig

〈罾にかけて毒殺しようとするものがあれば、またそのなそうとする〉

〈ものにいたる。悪く不幸にして希望なく苦しみの〉

〈衆生の、その父母の、またさらにひどい危〉

〈害のなかに入り、救うものなり。方便・知識〉

漢文原典の偈 25 対句に対するトルコ語訳は 4 行にすぎず、しかも内容は一致しない。この不一致は翻訳の原典によるものか、書写の過程に起こったものか、あるいは訳述の省略のために改変されたか、にわかに判定しがたい。ラドロフは、これに続く写本 A の第 212 行までの原典の偈文 (19 対句) にあたる部分もトルコ語訳者の独自のものである [Radloff 1911 : V] と述べるが、全く一致しないのではない。原典「諍訟経官処，怖畏軍陣中，念彼観音力，衆怨悉退散」にあたる訳語は欠けるが、その他は原典に従った訳文である。ただ、原典「常願常瞻仰，…滅除煩惱焰」に対応するトルコ語文 (写本 A195-203) は、読者 (供養者) を第 1 人称とし、観世音菩薩を第 2 人称とする一種の祈願文の体裁に変容されている。これは写経者の意図による可能性があるもので、あとでもう一度触れる。

2. 2. 写本 B, D もまた, 写本 A, C と同一系統のものであることは明確である。写本 D については, 1979年に, レールボルン氏(Prof. Dr. Klaus Röhrborn)の好意により, 写真から音写したメモが手もとにあるので, ここに記載しておきたい。写本 A と対照すると第138行から第147行にあたる。

Mainz No. 289, T. II Y. 54-a

- (1) [yuz]lüg är ävçi körkin ////////////////
- (2) birök känd urī-lar känd qüz-l[ar] ////////////////
- (3) [tın]lγlar ärsär quanši-'im pular ol ////////////////
- (4) qızlar körkin körtgürüp nomla////////////////
- (5) [tngri]-lär yäklär luu-lar kantar kintirvi-lär ////////////////
- (6) []-lar xan-larī mxuruklar kiši-lär kiši-////////////////
- (7) qutrulyu tınlylar ärsär quanši-'im ////////////////
- (8) alquqa yaraşı ät'öz körkin kört////////////////
- (9) [birök]k vçirpan-lar körkin kö////////////////
- (10) quanši-'im pular ol ////////////////
- (11) k(ö)[rt]gürüp nomlayu qu[t]γar[ur] ////////////////

2. 3. 以上4写本に対して, 写本 E は異なった系統に属する。羽田亨博士は写本 A と比較して次のように述べる。「両者は全く別訳にして, 行文, 訳語共に相合せず, 漢文より翻訳したるものなることは両者相同じきも, 此の断片のは彼に比して遙かに原文に忠実なる訳文なり」[羽田亨 1958: 143]という⁴⁾。写本 E は43行(写本 A 第38行から第64・65行), 破損の多い断片にすぎないが, 前節で述べた写本とは別に, 漢文原典から翻訳されたものの写本が存在したことを証明する貴重なものである。

さらに, 写本 F (写本 A 第88行から第122行)も写本 A とは異なる別訳である。明らかに原典に忠実な訳出と補足的な文章とが混在する, 異色のテキストである。写本 E と同一系統のものかは即断できないにしても, 「観世音菩薩」の訳語について, 写本 A 系統は“*quanši'im pular*”とするに対して, 写本 E 系統は“*quanši'im bodistv*”とする。14世紀の頭韻詩 [Hazai 1970, cf. 小田 1984] に引用された本経典の一部は, 後者の系統に属する, と思われる。

以上6写本の残存箇所を, 写本 A を基準にして表示すれば, 以下のとおりである。

表 1

| | |
|-----------|------------------------------------|
| I : A 系統 | |
| A | 1////////////////////224 |
| B | 70/////111 115//117 119////////143 |
| C | 4////////65 87///109 |
| D | 138///147 |
| II : E 系統 | |
| E | 38///64・65 |
| F | 88////////122 |

3. 言語の特徴

3.1. 文字と正書法：ラドロフによれば、写本 A の書体は鞆ペンで書かれた普通の筆跡であり、それほど(マニ經典のように)美しいものではない。q を γ から区別する、いわゆる発音異同符号の 2 点はかなり不規則であって、書写人は“よけいなもの”とみなしていたとラドロフは評する [Radloff 1911 : I]。ラドロフの活字本が写本の実際を忠実に写したのものとして、2 点符号の正誤表を仮につくると、下の表 2 のようになる⁵⁾。

表 2

| 文字 | 頻度 | 字母 | 正字数 | 字母 | 誤字数 |
|----|-----|----|----------|----|----------|
| q | 338 | Ḳ | 217(64%) | X | 121(36%) |
| γ | 221 | X | 209(95%) | Ḳ | 12(5%) |
| 計 | 559 | | 426(76%) | | 133(24%) |

確かに符号の脱落ミスが目につき、書写の後期性を示すものかも知れないが、まったく混乱しているのではない。

次に、s と ṣ の文字区分について、ラドロフは、原則的には書き分けられたが、書写人は不注意にも混同したとみる。活字本から数例をみると、*šmnanč*(133), *smnanč*(135); *upaši*

(133, 135)とある。末尾の写真図版をみると, *säkiz*(219), *sang*(222), *säli*(Radloff : säli), *upaši*(223)⁶⁾と読みうる。まぎらわしいが, 区別の痕跡は存在したと判断される。なお写真図版によれば, 語頭の *n* と ' (アレフ) または *a* の文字区別は明瞭である。

正書法については, 写本 A は慣例的に後期(モンゴル時代)まで行われた母音不記の例を含めて, ほとんど標準的な書法にしたがっている。ただ, *qurtul*-〈救われる〉の語は, *qutrulur* のように, *r* の音位転換例と *qurtulyu* のように, そうでないものが混在する。写本 C では, テキンの音訳に従うかぎり, 音位転換の例はなく, また両本ともに, *ärdäm* 〈能力〉であり, 後期写本にみられる, *ädräm* の例はない。写本 C は図版が発表されていないので言及できないが, 文字・正書法について写本調査の必要性がある。

さて, 写本 E, F についてみると, *q* の発音異同符号の 2 点は規則性をほとんど持たない。とくに写本 E は *y* に多く 2 点が付けられている。また写本 F では 1 点符号が, *q*, *y* の双方にしばしばみられる。両写本とも, *s*, *š* の字形の区別はほとんどないようにみえるが, 写本 F の *upaši*[16], *sapši*[41] は字形からそう読んだ方がよいという程度の区別はあるとみたい。写本 E の *ädrämlig*(34), *qutrulurlar*(30) は, 写本 E, F を通じて, この 2 例のみであるが, *r* の音位転換の例である。写本 F は, 語頭の *n* 字形の特徴をかりうじて保持する。また *d/t*, *s/z* の字母交替は目だたない。つまり写本 F はモンゴル期にくだる, ウイグル文字のもっとも後期的特徴を持たないとみてよい。

3. 2. 文法形態：写本 A では, 奪格(意味)は *-da/dä*, *-ta/-tä* により, *-dün/din*, *-tün/-tin* が現れない。後者の形態は写本 F では普通にみられる⁷⁾。写本 A の *yarutī birzüm* (200) 〈照らしくだされ〉, *örütir*(201) 〈起こす〉, *yarutir*(199) 〈照らす〉の分詞・動詞形は, エルダルによれば, このトルコ語訳本の成立を比較的初期におく理由となる [Erdal 1979 : 153]。また, 本来トルコ語にはなかったはずの関係代名詞 *kim* 構文を見いだすことができる (cf. ED 720-721 : *kim*)。前章, 例文(3)の [10] : “*ol…kim…sär*” は一つの定型的構文であるが, 写本 A (189-190) : “*ol yir suv yoq kim kntü özi tägmäsär*” 〈彼が自ら到達できない地水(世界)はないのだから〉もまた同例である。ただし, “*kim qayu tünly…ärsär*” 〈…であるところの人は〉のような関係従属節構文は, 定着形式として写本 A, F の随所にみられる。

3. 3. 外来語：借用語の問題は, すでに羽田亨博士によって写本 A の *sartpau*(45) と写本 E の *sartavaxī*(7) の対応が指摘された [羽田亨 1958 : 146]。また, *sartpau* は「薩寶」

にあたるという、羽田明先生の着想[羽田明 1971:427]が、最近吉田豊氏によって、ソグド語形として実証されている[吉田 1989:168-171]。写本 A 系統と写本 E 系統の間におけるサンスクリット語源の借用語形の相違は、この経典写本の比較研究を有意義にさせる視点である。

3.3.1. 借用語彙の研究は、とくにインド・サンスクリット語に語源を求めただけでなく、語形変化の特徴が貸借関係を示す結果になる仲介言語を特定することに関心が及んでいる。ソグド語・トハラ語(A, B)などの中央アジア諸言語の研究の深まりに負うところが大きいのである。語末変化の規則性に着目した庄垣内正弘氏は、とりわけトハラ語とソグド語の導入語彙に関して、既発表のテキストから網羅的に集めた語彙の精緻な分析を試みた[庄垣内 1978]。写本 A 系統について語彙の形式が「特定のソグド色の濃い文献」に属することを指摘している。さらに、ラウトは初期トルコ語仏典において同様の分析を行った[Laut 1986]。これらの研究例を参考にして、漢語とソグド・トハラ語からの借用語彙について、インド・サンスクリット語源の継承を分類すれば以下のような⁸¹⁾。

(I) 中国語借用語彙

(1) インド語意の継承 5 例

buš(A)(布施 ~ Skt. *dāna*), *quanši'im*(E, F), *quanši'im pusa*(A, B)(観世音菩薩, cf. *aryavalokdišvr* ~ Skt. *āryāvalokiteśvara*), *taysukin*(A)/*tay-sangun*(B)⁹¹⁾(大將軍 ~ Skt. *mahāsena*), *tayšing*(F), cf. *mxayan*(大乘 ~ Skt. *mahāyāna*), *toyin*(A)/*toyun*(B)(道人 ~ Skt. *bhikṣu*)

(2) インド語形の継承 2 例

bišamn(A, B)(毘沙門, cf. *vaiširavani* ~ Skt. *vaiśravaṇa*), *sv*(A)(娑婆 ~ Skt. *sahā*)

(3) その他 4 例

čm(A)(真), *lu*(B); *luu*(D)(龍), *tsun tsun*(A)(寸寸), *tsuy*(A)(罪)

(II) ソグド・トハラ語借用語彙

(1) インド語意の継承にもとづくソグド語 7 例

ažun(A, F)「(悪)趣」(<Sgd. 'žwn ~ Skt. *gati*), *āzrua*(A, B, F)「梵」(<Sgd. 'zrw' ~ Skt. *brahman*), *dintar*(F)(<Sgd. *δynδ'r*(*δynt'r*), 'priest' 'monk' cf. 吉田 1987:7, n. 21), *xormuzta*(A, B, F)「帝釈」(<Sgd. *xwrmwz't* ~ Skt. *indra*), *nizvani*(A)

「煩惱」(<Sgd. *nyβ'ny* ~ Skt. *kleśa*), *noš*(A)(<Sgd. *nwš* ~ Skt. *amṛta*), *tamu*
(A)「地獄」(<Sgd. *tmw* ~ Skt. *naraka*)

(2) インド語形の継承でソグド的特徴を有するもの15例

arxant(F)(<Sgd. *rx'nt* ~ Skt. *arhant*), *aryavalokdišvr*, [*arya*]-(*valokdišvar*)(C)
(<Sgd. *'ry'βrwkdyšβr* ~ Skt. *āryāvalokiteśvara*), *ārdni*(A), *ārdini*(E)「寶」(<
Sgd. *rtny* ~ Skt. *ratna*), *bodisvt*(A, B) / *bodistv*(E)「菩薩」(<Sgd. *pwdystβ*,
pwtysβty ~ Skt. *bodhisattva*), *buyan*(F), *buyanlayu*(A)(<Sgd. *pwny'n* ~ Skt.
puṇya), *mxarač*(F)(<Sgd. *mx'r'c* ~ Skt. *mahārāja*), *mxastv*(E)「摩訶薩」(<Sgd.
mx'stβ ~ Skt. *mahāsattva*), *pratikabut*(A), *prtikabut*(B), *pratikasanbut*(F)「辟支
佛」(<Sgd. *prt'ykpwtt* ~ Skt. *pratyekabuddha*; Skt. *sambuddha*), *sartpau*(A)「商
主」, cf. *sartavaxi*(<Sgd. *s'rtp'w*), *šmnanč*(A), *smnanč*(A, B), *smnč*(B), *šamnanč*
(F)「比丘尼」(<Sgd. *šmn'nch* ~ Skt. *śramaṇā*), *širavak*(A), *šravak*(A), *šrvok*(B)
「聲聞」(<Sgd. *šr'βkt*(pl.) ~ Skt. *śrāvaka*), *upasanč*(A, B, F)「優婆塞」(<Sgd.
'wp's'nch ~ Skt. *upāsikā*) *upasi* ~ *upaši*(A, B, F)「優婆塞」(<Sgd. *wp'sy* ~ Skt.
upāsaka), *včirpan*(A, D)「金剛神」(<Sgd. *βcr'p'n* ~ Skt. *vajrapāṇi*), *vidvay*(A)
(<Sgd. *wyōβ'γ* ~ Skt. *parivarta*-, cf. Maue-Röhrborn 1980 : 253, 264, n. 52, 54)

(3) インド語形の継承によるソグド・トハラ語共通の特徴を有するもの15例

asur(A, B)「阿修羅」(<Sgd. *'s'wr* ~ Tokh. (A) *asur*, (B) *asure* ~ Skt. *asura*)
bramn(A, B)「婆羅門」(<Sgd. *pr'ymn* ~ Tokh. (A) *brāmaṃ/prāmaṃ*), (B)
brāhmaṇe ~ Skt. *brāhmaṇa*), *čmbudvip*(A), *čmbudvip*(B)「娑婆」(<Sgd.
cnpwōβyp ~ Tokh. (A/B) *jambudvip* ~ Skt. *jambudvīpa*), *k'nt'r*(D)「緊那羅」(<
Sgd. *kynntr*), *kntv*(A), *kntv*(B), *kintirvi*(D)「乾闥婆」(<Sgd. *knt(')rβ* ~ Tokh.
(A) *gandharv-*, (B) *gandharve* ~ Skt. *gandharva*), *klp*(A, B)「劫」(<Sgd. *klp* ~
Tokh. (A) *kalp*, (B) *kālp* ~ Skt. *kalpa*), *kolti*(A), *koti*(A, B)「億」(<Sgd.
kwrtv/kwty ~ Tokh. (A) *kor(i)*, (B) [*koṭi*] ~ Skt. *koṭi*), *maxuruk*(A), *maxaruk*
(B), *mxuruk*(D)「摩睺羅伽」(<Sgd. ? ~ Skt. *mahoraga*), *makišvr*(A), *mxišvar*
(B), *makišv* [*ari*](F)「大自在」(<Sgd. *mx'yšβr* ~ Tokh. (A) *mahiśvar*, (B)
mahiśvare ~ Skt. *maheśvara*), *mxaklp*(F)(< Tokh. (A) *mahākālp* ~ Skt.
mahākālpā), *mxayan*(F)(< ~ Skt. *mahāyāna*), *paramit*(F)(<Sgd. *p'r'myt* ~
Tokh. (A/B) *pāramit* ~ Skt. *pāramitā*), *prit*(A)「鬼」(<Sgd. *pr'yt* ~ Tokh. (A)
pret, (B) *prete* ~ Skt. *preta*), *šakimun*(A)「釈迦牟尼」(<Sgd. *š'kymwn* ~ Tokh.

(A/B)śākyamuni ~ Skt. śākyamuni), *ślok*(A)「偈」(<Sgd. šr'wk'/šl'wk ~ Tokh. (A/B) ślok ~ Skt. śloka)

(4) インド語形の継承によるトハラ語形の特徴を有するもの6例

asanki(F)(< Tokh. (A) *asamkhe*, (B) *asamkhyai* ~ Skt. *asamkhyeya*), *mxabrxi*(F), cf. *āzrua* (< ~ Skt. *mahābrahman*), *sañcānačayi* (F) (< ~ Skt. *sañciñjaya/samciñjaya*)¹⁰⁾, *sart*(E)「商人」(< Tokh. *sārth* ~ Skt. *sārtha*), *sartava-xi*(E)「商主」, cf. *sartpau* (< Tokh. (A) *sārthavak* (*sārthavāhe*), (B) *sārthavāhe* ~ Skt. *sārthavaha*), *vaiširavani*(F)「毘沙門」, cf. *bišamn* (< Sgd. *β'yšrβn* ~ Tokh. (A) *vaišravaṃ*, (B) *vaišravane* ~ Skt. *vaiśravaṇa*)

表3

(I) 中国語借用語彙

(1) インド語意の継承 5例(A系統4例, E系統1例)

(2) インド語形の継承 2例(A系統2例, E系統0例)

(3) その他 4例(A系統4例, E系統0例)

(II) ソグド・トハラ語借用語彙

(1) インド語意の継承, ソグド語 7例(A系統6例, E系統4例)

(2) インド語形の継承, ソグドの特徴 15例(A系統12例, E系統10例)

(3) インド語形の継承, ソグド・トハラ語共通 15例(A系統12例, E系統4例)

(4) インド語形の継承, トハラ語形の特徴 6例(A系統0例, E系統6例)

上表3の(II-3)ソグド・トハラ共通のA系統12例はすべてソグド語系の由来である可能性が高い¹¹⁾。つまり、少なくとも写本Aの借用語は直接には漢語ないしソグド語である、と推定される。これに対してトハラ語系の6例は写本E, Fを特徴づけるものである。

3.3.2. 八部衆の名称：天龍八部衆の名称について、写本A系統のテキストのトルコ語形には書写の異同がある。まず、漢文原典(鳩摩羅什訳)との対応をみると、以下の通りである。便宜のために左肩へ順位の数字を付ける。

- 鳩 T. 262 : ¹諸天 ²龍 ³夜叉 ⁴乾闥婆 ⁵阿修羅
 写本 A(142-143) : ¹tngrilär ³yäklär ⁴kntrvlar ⁵asurlar
 B(b 22-23) : ¹tngrilär ³yäklär ²lular ⁴kntrvlar ⁵asurlar
 D(5-6) : ¹[tngrilär] ³yäklär ²luular ⁷kantar ⁴kintirvilar ⁵////
- (鳩) : ⁶迦樓羅 ⁷緊那羅 ⁸摩睺羅伽
 (A) : ⁶talim qraqušlar ⁸maxuruklar
 (B) : ⁶talim qraqušlar ⁸maxaruklar
 (D) : ⁶//////////lar xanlar ⁸mxuruklar

写本 A は(2)(7), 写本 B は(7)が脱落し, 写本 D は(1)(5)(6)が破損したほか, (7)に混同があると思われる。このテキストに一致する他のトルコ語とソグド語の例証は, 敦煌写本にあり, すでに言及したことがある[小田 1983]。おそらく(4)(7)は音写の異同がまぎらわしいために, 脱落したり, 混同されたのであろう。ともかく問題の借用語形(4)(5)(7)(8)がインド・サンスクリット語源の継承であることは疑いないが, 多少とも各写本独自の変異は免れない。概してトルコ語形はソグド語によく対応する¹²⁾。

さらに, これらと共通の変異を漢訳経典に見いだすことができる。たとえば, 鳩摩羅什(鳩)及び玄奘(玄)の訳語を標準形とすれば, ソグド・トルコ語形に近い変異形を, 初期漢訳経典に多く見いだす。たとえば, 支婁迦讖(支)・康孟詳(康)・竺法護(竺)の証例を挙げると, 以下のとおりである。

表 4

| Skt. | gandharva | asura | kiṃnara | mahoraga |
|------------|-----------|-------|---------|----------|
| 支 T. 224 : | 健陀羅 | 阿須倫 | 甄陀羅 | 摩睺勒 |
| 康 T. 197 : | 乾沓和 | 阿須倫 | 甄陀羅 | 摩休勒 |
| 竺 T. 154 : | 乾沓和 | 阿須倫 | 眞陀羅 | 摩休勒 |
| 鳩 T. 262 : | 乾闥婆 | 阿修羅 | 緊那羅 | 摩睺羅伽 |
| 玄 T. 220 : | 健達縛 | 阿素洛 | 緊捺洛 | 莫呼洛伽 |

ここでは緊那羅('kiĕn-'nâ'-lâ<Skt. kimnara)系とその変異形の甄陀羅(tsjĕn-d'â-lâ ~ Sgd. kyntr)系の2系統を漢訳者によって2分類してみよう。表5は大正新修大蔵経の索引をよりどころにして、巻1から巻21の証例に従って漢訳者の年代順に分類したものである¹³⁾。

表5

| Skt. kimnara | 年代(世紀) | 漢訳者 |
|---|--------|---|
| I : 変異形 甄陀羅 眞陀羅 緊抵縁* など ~ Sgd. kyntr | 2 - 3 | [1] 支婁迦讖 [2] 康孟詳 [3] 竺大力 |
| | 3 | [4] 支謙 |
| | 3 - 4 | [5] 竺法護 [6] 聶道眞 [7] 無叉羅(無羅叉) |
| | 4 | [8] 尸梨蜜 [9] 僧伽提婆 |
| | 4 - 5 | [10] 竺佛念 [11] 鳩摩羅什 [12] 佛陀耶舎 |
| | 5 | [13] 曇無讖 |
| | 6 | [24] 菩提流支 [30] 那連提耶舎 |
| | 6 - 7 | [32] 闍那崛多 |
| II : 標準形 緊那羅 緊捺洛 など | 3 | [4] 支謙** |
| | 4 - 5 | [10] 竺佛念 [11] 鳩摩羅什 |
| | 5 | [12] 佛陀耶舎 [13] 曇無讖 [14] 佛駄跋陀羅 [15] 聖堅 [16] 曇摩蜜多 [17] 求那跋陀羅 [18] 沮渠京聲 [19] 功德直 [20] 曇曜 |
| | 6 | [21] 曇荼羅仙 [22] 僧伽婆羅 [23] 曇摩流支 [24] 菩提流支 [25] 佛陀扇多 [26] 瞿曇般若 流支 [27] 毘目智仙 [28] 月婆首那 [29] 眞諦 [30] 那連提耶舎 [31] 闍那耶舎 [32] 闍那崛多 |
| | 6 - 7 | [33] 達摩笈多 |
| | 7 | [34] 波羅頗迦羅蜜多羅 [35] 玄奘(以下略) |

(注)*「緊陀羅」に同調する他の例は多く標準形である([11, 24, 32, 40])。

** II-4 支謙の例は後世の修正を受けたと見た方がよいのではなかろうか。

以上、変異形(I)に同調する Skt. mahoraga の例の多くもまた変異形の摩睺勒(.muâ-.γ̣əu-lək)または摩休勒(.muâ-.x̣i̯əu-lək)であり、これらはトルコ語形 *maxuruk*, *maxaruk*, *mxuruk* と音写が近似する。要するに、写本 A 系統にみえる天龍八部衆の借用語形は、初期漢訳經典の例と音写に共通点を見いだすことができる。漢訳經典が 4, 5 世紀ころから次第にサンスクリット語形の正確な音写に改められたにもかかわらず、トルコ語写本は、おそらくソグド語形を継承して、のちまで変異形を保持した、とみることができる。

4. 訳経の時期

4.1. 写本 A

写本 A 系統のトルコ語本の訳経について識語はない。ただ第 2 章で述べたように、敦煌藏経洞写本(大英図書館 Or. 8212(122), 出土記号 Ch. 00287)のなかに題記の一部が発見されている。この事実は訳経が藏経洞の閉鎖時期(11世紀初頭)より以前に行われたに違いないことを示唆する。

訳文の特徴について、ラドロフはこの訳者を評して、むずかしい反復的文章の翻訳に、たくみな表現のできた、うまれながらのトルコ人であったに違いないという [Radloff 1911: III]。決して直訳的な文章ではないが、漢文原典に沿った文意であることは明瞭である。しかしながら、さきに指摘した偈文の訳述については一考を要する。写本 A の第 195 行末から第 203 行中を邦訳引用すると、次のようである [Radloff 1911: 15-16]。

(A 195)私は(196)幸福を願う、クルキヤ。大なる慈悲の観想の知をもって、(197)私を観想し祝福したまえよ。汝の清浄・慈悲の光明、(198)日天(太陽)のごとき知恵の、汝の光がすべて(199)もろびとの心を照らす。汝は私の暗闇を(200)てらしてごされよ。私の罪障より解放してごされよ。すべて(201)世界の地水に大なる慈悲の雲を、汝は起こす、わが天よ。(202)甘露のごとき甘い雨水を降らせて、人びとの(203)煩惱の火を、汝は消す。

原典：常願常瞻仰，無垢清淨光，慧日破諸闇，能伏災風火，普明照世間，

悲體戒雷震，慈意妙大雲，澍甘露法雨，滅除煩惱焰

偈文の大筋は、仏陀が無尽意菩薩に説く文脈であるにもかかわらず、この部分のみ供養者の祈願文に変容されたと解される。これは、おそらく写本の目的によるものだ、と考え

られる。

4. 2. 写本 F

写本 E, F は漢文原典との対応がより明確であるが、終始直訳であるのではない。とりわけ写本 F には原典に存在しない行文が随所にみえ、注釈的文意を構成する。そのような挿入文はのちの書写において補足されたというのではなく、翻訳に際して敷衍された文脈のようにみえる。しかもその語句の特徴に翻訳時期の大枠を推定させるものがある。すなわち、シンッコ=シェリ(šingqo šäli)のトルコ語訳「金光明経」(ラドロフ刊本)のなかに見いだされる、例えば、「他化自在天」や「僧慎爾耶葉叉大将」(正了知大将)の訳語と明らかに共通である。あえて推測すれば、敷衍的文章の一部は、シンッコ=シェリの「金光明経」の翻訳(10世紀から1022年以前と推定される)から引用されたものとみることができる¹⁴⁾。

5. 写経の目的

写経の識語が写本 A にある。

写本 A(223) : drmuruč šäli upašŷ qulqy-a küsüšingä bitidim

〈私, ダルムルチ=シェリは優婆塞クルキヤの発願によって書いた〉

ダルムルチ(<Skt. dharmaruci)という書写人の名前は、僧侶であることを示すとみたい。本文中に、“*mn qut qolurmn qulqy-a*”(A 195-196)〈私は幸運を願う, クルキヤ〉という文脈は¹⁵⁾、おそらく供養者(施主)である優婆塞(在家の男信徒)クルキヤの祈願を吐露したものである。書写人によって、クルキヤという人名が書き加えられたのである。前章で述べたように、これに続く一部分を含めて、最小限、第1人称(-mn, mini), 第2人称(-siz)の代名詞を挿入して施主であるクルキヤの祈願文に変容したとすれば、ありうることである。写経が仏教信徒の布施行為によって行われ、そのために信徒の名前が経典の本文中に書き(読み)込まれたのではなからうか。

確かに、この前後の文章を、原典に照らせば、省略または変容の作為がある。民間における観音信仰のひろまりはトルコ人の間でも例外ではなかった。経文の一部に作為が加えられて観音信仰の具体的一端が示されたとみることができる。

む す び

トルコ語本「観音経」の写本 A は、写本断片 B, C, D によって部分的に校異を考えることができるが、さらに新しい写本の発見が期待される。さしあたり明かなことは、写本 A

は供養者の発願に沿った行為のために、原訳を忠実に書写したものではなさそうであろうことである。従ってこれを原訳とみなす誤解は避けねばならない。しかしながら、借用語の分析結果からすれば、これまで発見されたトルコ語仏教文献のなかでは、限られたある「特定のソグド色の濃い文献」(庄垣内)に属する。同様な特徴をもつ『妙法蓮華経』の写本断片と比較するとき、元来その1章として翻訳されたものと考えられる。そうだとすれば、どのようなソグド的環境のもとで翻訳されたのであろうか。

ソグド語本の仲介を仮定する考えのあることは、初めに述べたが、いまはソグド的環境は三つの場合を想定することができる。

- (1) ソグド語本の設定においてソグド語から重訳されたか、またはソグド語本が参照された。これはトルコ語本の成立に直接かかわるソグド仏教の存在が前提となる。Maitrisimit nom bitig《マイトレヤとの邂逅本》の出現に関するラウト仮説に通じるものである(cf. Laut 1986)。
- (2) ウイグル支配下においてソグド人が漢語から翻訳したとみることも可能である。これと比較される事例があるとすれば、たとえば、モンゴル支配下におけるモンゴル語「八陽経」にトルコ語本の影響がみられることである(cf. 小田 1986)。
- (3) ソグド系文化の影響下にあったトルコ人が漢語から直接トルコ語に翻訳した、とみることもできる。ソグド・ウイグル系マニ教徒がトルコ語本の出現に関与したという仮説はウイグル仏典の成立に関する森安説である[森安 1989]。

いずれにしてもトルコ語本「観音経」の写本 A にのみ伝えられた *sartpau*〈商主〉の語を、羽田明先生の着想に導かれてソグド古書簡のなかに発見したのは、まさしく吉田豊氏の快挙である。天龍八部衆の名称の古い語形もソグド語に仲介されてこのトルコ語本に保持された、とみてよいであろう。ソグド人の間に伝えられた仏教文化の影響下において、直接であれ、間接であれ、漢語から翻訳されたことの実事を証明するのである。

なお写本 E と写本 F は重なり合うところがないので、確実に同一系統の訳本かどうかはわからない。少なくとも後者はトルコ語本「金光明経」との関係を実証する、新しい知見を提供し興味深いものがある。

注

- 1) Laut 1986, 森安 1989, 小田 1990 参照。
- 2) Hamilton 1986 : I, 27-31 ; II, 273. 写真によれば、破損面に次行の一部が残るので、題記メモだけでなく、本文が後に続くものだったかもしれない。これは漢文經典の裏面が利用された。表

面の漢文経典の欄外に、“*namo but namo dr̄m namo 'sing |soyū| soyunčy čäčäk nom bitig*”南無仏、南無法、南無僧、妙華経とあり、不完全に『妙法蓮華経』の題記がある。

- 3) 写本 A 第 5 行の *s* (テキンは *tiser* とみた) は *siz* (汝) ではなからうか。A 第 7 行の *oq* は、テキンのとおり *sav yoq* (言葉はない) であろう。また写本 A 第 8 行 [*valoki*] *d[s] vr*; 写本 C 第 4 行 *valokdišvar* [Ş. Tekin 1960 : 9] である。
- 4) 羽田博士の疑問としたいいくつかの解説について、今では確定することができる。 *öng* (?) *kördüg* (?) (A-11) → *öng kürdük* (吹雪), cf. ED 168, 739; *angra* (?) (*angrau* ?) (A-12) → *ürgän* (いるとき); *k(ä)nlig* (?) *ädrämlig* (B-13) → [*kü*] *kälig ädrämlig* 「威神之(力)」, *kälig* のトルコ語源・意味は必ずしも明かでない。「神通(力)」の訳語としてもみえる (cf. Röhrborn 1971 : 26 n. 293; ED 717)。
- 5) ラドロフは写本の資料的価値を失わせないために活字本は原文の書写を忠実に再現することを試みたという (Radloff 1911 : IV)。
- 6) “*upaši*” (<Sgd. 'wp'sy) は “*upasi/upasi*” が正しいはずであるが、トルコ語化してこのように読まれたかもしれない。
- 7) Cf. Radloff 1911 : 39 (n. 48). 写本 F の例 : *ültay-din tuymiš* [35] (因縁から生まれた), *ayñy nomlardin* [46] (悪法から) については付編参照。
- 8) 用例の形式は、写本のトルコ語形(写本記号)「漢文原典」、比較のトルコ語形(cf.) <仲介言語例(ソグド語(Sgd.)/トハラ語(Tokh.)) ~ 語源(Skt.) とする。主要参考文献は以下のとおりである。ソグド語文献 : H. Reichelt, *Die soghdischen Handschriftenreste des Britischen Museums*, I (1928), II (1931), Heidelberg ; I. Gershevitch, *A Grammar of Manichean Sogdian*, Oxford 1954 ; D. N. MacKenzie, *The Buddhist Sogdian Texts of the British Library*, Leiden 1976. トハラ語文献 : W. Krause & W. Thomas, *Tocharisches Elementarbuch*, I (1960), II (1964), Heidelberg.
- 9) “*sangun*” は草原(東)ウイグル国の時代に称号として導入された借用語で、のち人名を構成する固有名詞となったようにみえる。
- 10) 本稿付編の写本 F 訳注参照。
- 11) *k'nt'ŕ*, *kntv*, *maxuruk* は第 2 節「八部衆の名称」参照。 *priŕ*, cf. 庄垣内 1978 : 89 ; Laut 1986 : 135.
- 12) 写本 A, B, D との対応を明らかにするため引用すると、トルコ語の証例は、「八陽経」ロンドン写本である (British Library Or. 8212(104)).

¹ngrilär ²yäklär ³uluy küčlög luular ⁴kyntrlar ⁵asurlar

⁶talm qraqušlar xanlar ⁷kintrlar ⁸muxurlar

<諸天, 諸鬼, 大力の諸龍, 4kynt'ら, 5asurら,>

<掠奪の黒鳥の王ら, 7kintrら, 8muxurら>

ソグド語はローゼンベルグ Fr. Rosenberg(1920)発表のテキストである。

(28) …'PZY ZK 'nyw 'βγyšt

(29) ZY ^{5?}pr'ykth ZY cw ²n'kt ZY γrβ ³ykšt'

ZY ⁴knt'rβt ZY ⁶kr'wrt ZY ⁷kyntrt

(30) ZY ⁸mx'wrt kyty …

<それから、¹他の神々と^{5?}魔女たち、²龍なるものども、>

<また³多くの夜叉たち、⁴knt'rβら、⁶kr'wrら、⁷kyntrら>

<と、⁸mx'wrら、それらは…>

(注)ローゼンベルグのテキストについては、幸いに吉田豊氏の指示を仰ぐことができたことに謝意を表す(吉田豊 1981. 6. 16書簡)。音写の修正はそれによるが、邦訳はローゼンベルグのフランス語訳を参照した。Fr. Rosenberg, Deux fragments sogdien-bouddhiques du Ts'ien-fo-tong de Touen-houang, II. Fragment d'un sūtra. *Izvestija AN*. 1920, pp. 399-420 ; 吉田豊「ソグド語文献」講座・敦煌 第6巻『敦煌胡語文獻』(1985), p. 204.

13) 出典例(大正藏経番号: No. (巻数)頁段(a, b, c)行数)

甄陀羅: [1] No. 224 (8) 438c12, No. 417 (13) 898a2 [2] No. 197 (4) 164c15 [4] No. 474 (14) 915b24 [5] No. 292 (10) 623c7 [6] No. 483 (14) 667c29 [7] No. 221 (8) 51c15 [9] No. 125 (2) 550c27 [10] No. 212 (4) 620c29, No. 226 (8) 516c28, No. 309 (10) 1034c11

眞陀羅: [1] No. 624 (15) 366c25, No. 626 (15) 389a12 [2] No. 184 (3) 461a15 [3] No. 184 (3) 461a15 [4] No. 632 (15) 461a28 [5] No. 154 (3) 99a2, No. 186 (3) 488b13, No. 222 (8) 197a9, No. 481 (14) 636b22, No. 513 (14) 785b18, No. 565 (14) 924b19, No. 585 (15) 1a20, No. 627 (15) 406b20 [7] No. 221 (8) 50c9 [8] No. 1331 (21) 507c9 [10] No. 309 (10) 966a21, No. 656 (16) 1b15 [12] No. 1 (1) 81b28

緊陀羅: [10] No. 656 (16) 7a19 [11] No. 223 (8) 363b29, No. 657 (16) 129a1 [13] No. 397 (13) 247c14 [24] No. 671 (16) 518a5 [30] No. 310 (11) 375a14, No. 639 (15) 549a8 [32] No. 190 (3) 677a7, No. 479 (14) 606a22 [40] No. 187 (3) 573b12

緊那羅: [4] No. 153 (3) 52c24, No. 530 (14) 808a17, No. 200 (4) 203a14 [10] No. 384 (12) 1044a13 [11] No. 201 (4) 336a11, No. 227 (8) 544c22, No. 286 (10) 519a5, No. 420 (13) 926b20, No. 426 (14) 66a14, No. 464 (14) 481c9, No. 475 (14) 537b20, No. 482 (14) 660b20 [12] No. 405 (13) 648b19 [13] No. 157 (3) 192a14, No. 374 (12) 430b19, No. 397 (13) 21c28, No. 663 (16) 336a20 [14] No. 666 (16) 457a27 [15] No. 294 (10) 855a23 [16] No. 407 (13) 662b12 [17] No. 99 (2) 28b2 [18] No. 452 (14) 420b1 [19] No. 414 (13) 800a11 [20] No. 1335 (21) 571b21 [21] No. 658 (16) 209b18, No. 659 (16) 241b23 [22] No. 233 (8) 733a12, No. 314 (11) 770b24 [23] No. 305 (10) 929a26, No. 357 (12) 239b27 [24] No. 440 (14) 114a7, No. 465 (14) 483c28 [25] No. 835 (17) 888c14, No. 1344 (21) 851a7 [26]

No. 421 (13) 943b23 [27] No. 341 (12) 115c27 [28] No. 231 (8) 687b17, No. 478 (14) 597c20 [29]
 No. 669 (16) 477c10 [30] No. 310 (11) 103b22, No. 386 (12) 1076b16 [31] No. 673 (16) 640c25 [32]
 No. 190 (3) 691c13, No. 443 (14) 354a3 [33] No. 415 (13) 830b5 [34] No. 402 (13) 540b28 [36] No. 486
 (14) 697b13以下略

緊那洛：[35] No. 220 (5) 276c12, No. 411 (13) 777a13 [40] No. 970 (19) 357c12

14) 付編訳注参照。なお、シンッコ=シェリ訳「金光明経」の翻訳時期については森安孝夫氏の解説を参照されたい[森安 1985a：59-60]。1022年の日付と判定されたこのトルコ語経典の序文写本断片(T. II Y. 37)は、依然として所在不明のようであるが、ル=コックによって残された音訳テキストは、最近ツィーメ氏によって確認され公表された[Zieme 1989a]。

15) ラドロフ及びシナシ=テキンは、“qulqy-a”を人名とみないで、〈しもべ〉と訳し、末尾の写経識語について、次のように解釈する。“Auf den Wunsch des Dharmuruci-Sali, des Laienbruders, der nur ein Sklave ist, habe ich es geschrieben.”〈男信徒で、ひとりのしもべにすぎない、ダルムルチ=サリの発願によって、私は書いた〉[Radloff 1911：28]。“Ben zavallı, upasaka Drmuruç (Skr. Dharmaruci) Seli'nin isteği üzerine yazdım.”〈私しもべは、優婆塞ダルムルチ=セリの発願によって、(私が)書いた〉[Tekin 1960：25]。両者ともダルムルチを優婆塞(男信徒)の人名と理解し、写経の発願者とする。したがって書写人の名前は書かれなかったとみる(cf. Radloff 1911, VI)。また後者の〈私しもべ〉(qulqy-a)を主辞(第1人称)とするには無理がある。少なくともここでは優婆塞 qulqy-a の発願によってと理解しなければならない。筆者は、サンスクリット名に由来するダルムルチを書写人の人名と考えたい。クルキヤ(qulqy-a)の原意は qul〈しもべ〉+ qya(接尾語：cf. ATG, 155)であるが、ここでは優婆塞の呼び名としておきたい。Burxan quli〈仏奴〉, Nom quli〈法奴〉, Toyin quli〈僧奴〉などの人名がウイグル文書類にみえることを考えると、“qulqy-a”と呼ぶこと自体、決して卑下を意味したのではあるまい。

付編 旧「素文珍藏」写本断片訳注

「素文珍藏」写本断片は卷子に装丁され、取得の漢文識語が添付されている。トルコ語本「観音経」の残簡である。ここに音訳テキストと訳注を發表し写真図版を付けて研究の便宜としたい。羽田明先生から出土写本の解説に手ほどきをいただいて、30年が経つ。ここに新しい断片の解説研究を授けられたことに対して報恩の思いを禁じえないのである。

写本残簡は3断片(A:18行,23cm×23.3cm B:20行,25.7cm×23.3cm C:46行,60.2cm×23.3cm)からなるが、漢文原典と対照すれば、断片の順位(B,C,A)と数行の重なりにより配慮することによって、容易に再構成が可能となる。卷子本78行の残簡である。行間隔1.3cmで、行長20.4cmの両側に朱罫欄が引かれ、朱線の行罫に重ねて黒墨で文字が書写されている。

卷子に装丁された現状は以下に示す図面のようなものである。本稿の音訳テキストは、まずABCの順序に通し番号を付けた。そして[]内に復元番号を示し、その順位にしたがい配列したものである。B断片とC断片は4行の接合部分を持つ。またC断片とA断片は2行が接合する。なお、写真図版はA,BとCにわけ、漢文識語と卷子装丁本の表題を別に掲載した。

テキストの音訳表記は、破損部分を適宜に斜線(///)、復元部分を角括弧[]、部分的補完を括弧()によって行った。また文字の一部がみえても解説困難なときは文字数を予測してピリオド(...)を入れた。原写本の句読点の2点はコロン(:)で示した。解説作業の段階で、来日中(1990年5月)のベルリン科学アカデミーのツィーメ(Dr. Peter Zieme)氏から二、三の語について示唆を得たことを記して謝意を表す。

「観音経」原典は、大正新修大蔵経卷第九 No. 262「妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五」(56c-58b)による。略記と引用・参考文献は、次のもののほかは末尾に記載した。

織田仏辞：織田得能著『織田仏教大辞典』(補訂縮刷版)東京 大蔵出版 1980.

金光明経：義浄訳『金光明最勝王経』大正(T.)16, No. 665 pp. 403-456.

金光明経トルコ語本：ラドロフ刊本→Suv.

総合仏辞：『総合仏教大辞典』（発行者西村明）京都 法蔵館 1987.

大正(T.)：大正新修大蔵経.

対照仏辞：荻原雲来編纂『漢訳対照梵和大辞典』（増補改訂版）講談社 1979.

ATG：A. v. Gabain, *Altürkische Grammatik*, Wiesbaden 1974.

BTT：Schriften zur Geschichte und Kultur des Alten Orients. Berliner Turfantexte, Berlin.

ED：G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*, Oxford 1972.

DTS：V. M. Nadeljaev, D. M. Nasilov, E. R. Tenišev, A. M. Ščerbak, *Drevnet-jurkskij slovar'*, Leningrad 1969.

Suv：V. V. Radlov', S. E. Malov', *Suvarnaprabhāsa*, Bibliotheca Buddhica XVII, Sanktpeterburg 1913-1917 (Neudruck：Osnabrück 1970).

以下、テキストの音訳, 注, 邦訳(付：原典), 訳注, 内容の注釈を示す。

テキストの音訳

[11] 19 //(.....) (D)(.) (.)//
 [21] 20 //(.)//////////////////// ü(kü)š tālim ärür mu
 [31] 21 // yrlïqadï:(?) [alq]ïncï[sï]z] kög(ü)[z] (.....) ärtïngü üküš
 [41] 22 [ti](tir)(?) : atï kötrülmïš tngrim tip (ötün)ti : tngri tngri
 [51] 23 [burx]lan yänä inča tïf p yrlïq(adï) : birök yänä ikinti taqï
 [61] 24 [bi](r) kiši bo kö[r]gäli (ärklïg) (quanš)i-'im bodistv-ning atïn
 [71] 25 [atasar] : ('än)g-mïntïn bir ödün ky-ä ärsär ymä tapïnsar -r
 [81] 26 //(.)//// (u)unsar(?) : bo i(k)i törlüg kiši-ning buyan ädgü
 [91] 27 [qilïnçï] (tüp) tüz adïrsïz bir tæg ärür : yuz ming tümän
 [101] 28 ////////////// [ö]dlär-tä yip ašap tükädinçïz titir : alqïncïz
 [111] 29 [kögüz] // bo körgäli ärklïg quanšï-'im bodistv-ning
 [121] 30 ////////////// (b)uyan ädgü qilïnçï asïyï (t)ususï (ymä)(?) muntaï
 [131] 31 yit(i)[nçïz ülg]ünçïz ülsüz tüpsüz är(ü)[r : ti]trü kö(r)[gi](l)(?) :
 [141] 32 alqïnçï(sïz) (kö)gü[z bodis]tv yänä tïnlï-lar-qa antaï yang[li]y(?)
 [151] 33 inča tip ötünti : (a)ntaï ärsä(r) tip : nom (nom)layu qutïyarur :
 [161] 34 körgäli ärklïg (q)uanšï-'im // // [šal]mnanç upašï upasanç bo
 [171] 35/39 yirtin(çü)-tä /// yangi[r]ti(?) (.) //(.)singä törü-singä
 [181] 36/40 (.)// (.)o)mla// //(.)//(.) körkin nom/// (ün)ingä ägzïgingä
 [191] 37/41 al altaï-lïy küçi kösüni 'Y(K)////////////////(.) ärsär
 [201] 38/42 tngrim tip tidi : ötrü alqïncï[sï]z] (k)[ögüz] //////////////
 [211] 43 tip yrlïqadï : tözün-lär o'ylï-y-a (birök) (q)ayu balïq-[taqï]
 [221] 44 uluš-taqï tïnlï-lar-da kim qayu tïnlï-lar-ta üküš ažun-
 [231] 45 -lar-da burxan-lar ädgü-singä süzülüp on törlüg ornaï-
 [241] 46 -lar on törlüg yorïy-lar : on törlüg buyan ävir-

- [25] 47 [-māk]-lār : on tör(l)[üg] yir orun-larda ulatı üc
 [26] 48 a(s)[an]ki yüz mxakıp-lıy uzun öd üzä bişyuluq alti
 [27] 49 paramit-lıy yivig üzä bütgölük säkiz biligin yarılıp
 [28] 50 tört bilgä biligin uqulup üc at'öz adirtı üz[ä]
 [29] 51 bililgölük ärdüktäg kirtü tüz tüplüg tütrüm täring
 [30] 52 yörüglüg burxan-lar körügi bodistv-lar yoriyi tayşing
 [31] 53 mxayan nom içintä ögrätig qılmıs ärsär-lär ötrü kör-
 [32] 54 -gäli ärklig quanşı-'im bodistv ol tinly-lar-qa burxan-
 [33] 55 -(lar) körkin körkitip nom nomlayu qutyarur : birök kim
 [34] 56 [qayul] tinly-lar : pratikafsa](nbut)-lar ädgü-singä süzülüp :
 [35] 57 (.)//////// (i)ki ygrmi [blölu(klüg) tiltay-din tuymıs nomlar
 [36] 58 içintä ögräl(t)ig [qılmıs ärsälr-lär ötrü körgäli ärklig
 [37] 59 quanşı-'im bodistv] (ol) tinly-lar-qa praktikasanbut-(lar) (kör)-
 [38] 60 -(kin) k(ör)kitip nom n(o)ml(ayu) qutyarur : birök kim qayu tinly-
 [39] 61 -lar ü(k)üş azun-lar-da ärxant dintar-lar ädgü-singä
 [40] 62 süz(ülüp) [ängäk til(r)gin öcmäk yol tigmä bo
 [41] 63 tört] (.)////////// (.) kirtü-si nomlar-qa s(ap)şi
 [42] 64 (-orun)-lar içintä (ö)grätig] qılmıs ärsär-lär : ötrü kör-
 [43] 65 -(gäli) ärklig quanşı-'im b(od)list](v) ol tinly-lar-qa ärxant dintar-
 [44] 66 -(lar) körkin körkitip nom nomlayu qutyarur : birök kim
 [45] 67 qayu tinly-lar mxabrxi uluy äzrua tngri ornınga süzülüp
 [46] 68 bo ämranmaq uyuş-t(aq)[i] yvlaq ayıy nom-lardın öngi üdrül-
 [47] 69 -gü(l)ük nom-larda ögrätig qılmıs ärsär-lär : ötrü körgäli
 [48] 70 [ärklig quanşı-'im [bo](di)s(t)[v] ol tinly-lar-qa mxabrxi uluy
 [49] 71 (ä)zrua] (t)[ngri körkin körki](tip) nom nomlayu qutyarur : birök
 [50] 72 kim q(ay)[u tinly-lar tngri] (xa)nı xormuzta tngri ornınga
 [51] 73 süzül(üp) S(W)(...)/// [tn](g)ri yirintä tuşyuluq iş ködüg
 [52] 74 (.)/(.)g-lä(r)(?) (.)/// (ögrätig) qılmıs ärsär-lär : ötrü körgäli
 [53] 75 ärklig quanşı-'im b(od)istv ol tinly-lar-qa tngri xanı
 [54] 76 xormuzta tngri körkin körkitip nom nomlayu qutyarur : birök
 [55] 77 kim qayu tinly-lar : altınc qat orun ämranmaq uyuş uçı
 [56] 78 (a)dın-lar bigürtmäsi üzä ärsindäci tngri yiringä s(.)////(.)
 [57] 79 alti qat tngri yirintä tidişsiz (äd)//////////
 [58] 80 -in buyan ädgü qilinç qıl//////////
 [59] 81 ötrü körgäli ärklig q[uanşı-'im] ////////////
 [60] 82 -qa ärklig tngri] körkin ////////////
 [61] 1/83 b(i)[r](ö)k kim qayu tinly-la(r)//////////
 [62] 2/84 (ö)lo(y)-ınga yalınga ////////////
 [63] 3 qı(lm)is ärsär-(lä)r : ötrü ////////////
 [64] 4 ol (t)inly-lar-qa ärklig mak(i)şv[ari] ////////////
 [65] 5 nom (no)mlayu qutyarur birök kim (q)[ayul] //////////[säkiz otuz]
 [66] 6 baı tngri-lär urngutı sançanaçayı atly tngridäm] şüı başı-
 [67] 7 -ning çoyınga yalınga süzük kirtgünç kqngül-lüg
 [68] 8 ärsär-lär : ötrü körgäli ärklig quanşı-'im bodistv ol
 [69] 9 tinly-lar-qa säkiz otuz baı tngri-lär urngutı sançanaçayı
 [70] 10 atly tngridäm şüı başı körkin körkitip nom nomlayu qut-
 [71] 11 -yarur : birök kim q(ayu) tinly-lar : küü-lüg çoy-(luş) suv-
 [72] 12 -luş yalın-lıy vaişiravani mxaraç-ning çoy-ınga yalın-
 [73] 13 -ga s(üzü)k kirtgünç kq(ng)ül-lüg ärsär-lär : ötrü körgäli
 [74] 14 ärklig quanşı-'i(m) [bodistv] ol tinly-lar-(q)a vaişiravani
 [75] 15 mxaraç körkin [körkiti]p nom nomlayu qu(t)yarur : b(irök)
 [76] 16 ////////////[ylirtinçüdäki ul(u)ş ilig-lär xan
 [77] 17 ////////////[kqngül]-lüg ärsär-lär : ötrü
 [78] 18 //////////// [bodistv] ol tinly-lar-////

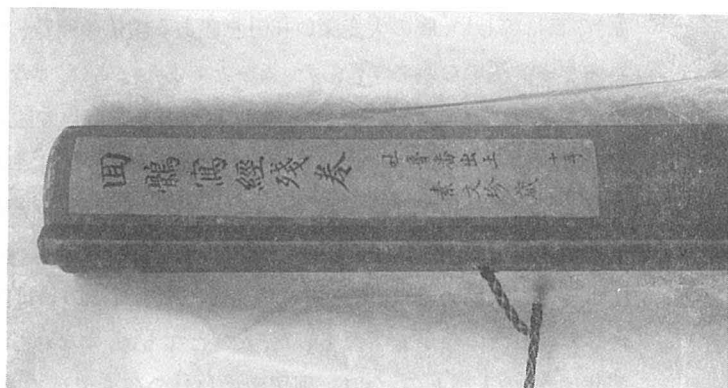
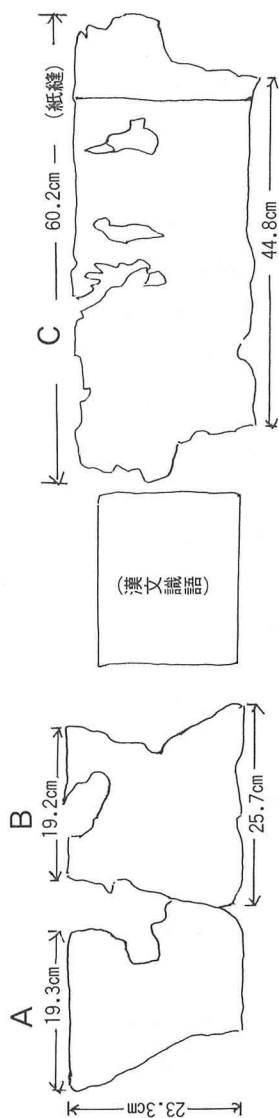
テキストの注

- [3] (.....) : *bodistv* の可能性がある。
- [8] //(.)//// : [*ay*] *ir*[*layu*] であるかもしれない。
- [10] ////////// : [*koti kalp*] の語がはいると考えられる。
- [11] ////////// : [*bodistv*] と復元できるかもしれない。
- [12] ////////// : [*atīn atasar*] の可能性がある。
- [16] //// : [*toyim*] の語がはいる可能性がある。
- [17] *yangi*[*rti*] は確かでない。
- [18] (.)// (.)mla// (.)//(.): (*n*) [*om n*] (*o*) *mla*[*yu*] (?) (.)//(.) であるかもしれない。
- [41] *tö*[*rt*] (.)//////////(.): *tö*[*rt*] (*t*) [*örlüg tözünlä*] (*r*) と補うことができる。
- [51] SW(...)//// : *s*(*uda*) [*vas*] または *süzük* の可能性はある。訳注[51]参照。
- [56] *s*(.)////(.): *s*(*v*) [*igl*] (*g*) (?) , 一つの可能性にすぎない。
- [57] (*äd*)//// : (*äd*) [*gü*]//// の可能性はある。

テキストの訳

[1][2]……………多数であるか,[3]…と仰せられた。無尽意[菩薩は(?),]たいへん多い,[4]といわれる,世尊わが天よ,と申し上げた。天の天たる[5]ブルハン(=仏陀)は,またかように仰せられた。もしまた第二のもう[6]一人も,この観(想)する力のある観世音菩薩の名前を[7]称するならば,まずこれより,一時なりとも礼拝すれば,[8][恭しく]敬えば,この二種の人の福德の[9]行為はまったく等しく区別ない一つのものようである。百千万[10][億劫]時に飲み食らい尽くせないほど,といわれる。無尽[11][意菩薩よ(?),]この観想する力のある観世音菩薩の[12][名前を称すれば(?),]福德の行為の利益もまた,このように[13]未到の計りえない底なしである。汝はよく観察せよ。[14]無尽意菩薩は,また人びとのために,以下のように[15]かように申し上げた。以下のようにとは,法を説き祝福する(ことである)。<[16]観想する力のある観世音は,[比丘],比丘尼,優婆塞,優婆夷,この[17]世間に…新たに(?)…掟によって,[18]……………音声による[19]方便の力は…とは,[20]わが天よ,といった。そこで無尽意[菩薩へかよう][21]に仰せられた。善男子よ,もしどこかの町にある[22]国にいる

人びとにあって、多くの世界[23]において、諸仏の徳によって清められて十種の地処、[24]十種の行、十種の功徳を回向する[25]こと、十種の地処などにおける三[26]阿僧祇、百大劫の長時に修業されるべき六[27]波羅蜜の飾りによって成すべき八識をもって破られて[28]四智をもって理解し、三身の分別によって[29]知られるべき「あるがまま」(=真如)の真に等しい、底の大変深い[30]意義ある諸仏の照覧(?)と菩薩の修業と大乘[31]マハーヤーン法のなかで学習した、人びとであるならば、すなわち観想[32]する力のある観世音菩薩は、その人びとのために諸仏[33]の姿を現して法を説き祝福する。もし[34]縁覚者の徳によって清められ、[35]…十二部の因縁から生まれた法[36]のなかで学習をした、人びとならば、すなわち観想する力のある[37]観世音菩薩は、その人びとのために、縁覚者の姿[38]を現して、法を説き祝福する。もし[39]多くの世界において阿羅漢僧の徳によって[40]清められ、苦・集・滅・道と称するこの[41]四[種の聖なる]真実の法に適合した[42]所のなかで学習をした、人びとならば、すなわち観想する[43]力のある観世音菩薩は、その人びとのために、阿羅漢僧[44]の姿を現して、法を説き祝福する。もし[45]マハーブラーフミー大梵天のところによって清められ、[46]この欲界にある邪悪の法から離脱[47]すべき法において学習した人びとならば、すなわち観想する[48]力のある観世音菩薩は、その人びとのために、マハーブラーフミー大[49]梵天の姿を現して、法を説き祝福する。もし[50]天王ホルムズタ [=帝釈]天のところによって[51]清められ、…天の地に生まれるべき事を[52]……学習した、人びとならば、すなわち観想する[53]力のある観世音菩薩は、その人びとのために、天王[54]ホルムズタ [=帝釈]天の姿を現して、法を説き祝福する。もし[55]第六層所の欲界の端、[56]他者を変化せしめて支配する(=他化自在)天の地によって[享樂の](?) [57]六層天の地で、障害のない……[58]をもって、福德の行為をなし……人びとならば、[59]すなわち観想する[53]力のある観世音菩薩…[60]に有力な天の姿を[現して、法を説き祝福する。] [61]もし、……[62]威光によって、……[63]した、人びとならば、すなわち……[64]その人びとのために有力なマヒシュヴァリ [=大自在天]…[65]法を説き祝福する。もし[二十八][66]姓の諸天の大將、サンチャナチャイと名付ける天の將軍[67]の威光によって清い信心をもてる人びと[68]ならば、すなわち観想する力のある観世音菩薩はその[69]人びとのために、二十八姓の諸天の大將、サンチャナチャイ[70]と名付ける天の將軍の姿を現して、法を説き[71]祝福する。もし、名声ある栄光ある瑞々しい[72]威光あるヴァイシラヴァニ [=毘沙門]大王の威光によって[73]清い信心をもてる人びとならば、すなわち観想する[74]力のある観世音菩薩はその人びとのために、ヴァイシラヴァニ [=毘沙門][75]大王の姿を現して、法を説



右田鶴寫經殘卷正壽寺出土
素文先生撰本新羅王義見
法園人抄布和形得燉煌石室
田文徑毫如巨匠遂云岩時燁
新羅倫行并直抄君乃腐
載燁在巴蘇多惆悵兮
素文猶信實以殘經不正
因學域外六大寺事也
甲寅五月惇庵并志

(漢文識語)

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、

B

A

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、

C

き祝福する。もし [76] ……世界にいる大君主たち [77] …… [清い信心] をもてる人びとならば、すなわち [78] 観想する力のある観世音] 菩薩はその人びと [のために]

漢文原典(数字は上記行数を示す)

「是善男子善女人功德²多不, 無盡意言, 甚多世尊,³佛言, 若復有人受持觀世音菩薩名號, 乃至一時禮拜供養, 是二人福正等無異, 於百千萬¹⁰億劫不可窮盡, 無盡意, 受持觀世音菩薩名號, 得如是無量無邊福德之利, 無盡意菩薩白佛言, 世尊, 觀世音菩薩, 云何遊此娑婆世界,¹⁵云何而為衆生說法, 方便之力, 其事云何,²⁰佛告無盡意菩薩, 善男子, 若有国土衆生應以佛身得度者, 觀世音菩薩即現佛身而為說法,³¹應以辟支佛身得度者, 即現辟支佛身而為說法,³⁰應以聲聞身得度者, 即現聲聞身而為說法,⁴⁵應以梵王身得度者, 即現梵王身而為說法,⁵⁰應以帝釈身得度者, 即現帝釈身而為說法,⁵⁵應以自在天身得度者, 即現自在天身而為說法,⁶¹應以大自在天身得度者, 即現大自在天身而為說法,⁶⁵應以天大將軍身得度者, 即現天大將軍身而為說法,⁷¹應以毘沙門身得度者, 即現毘沙門身而為說法,⁷⁰應以小王身得度者, 即現小王身而為說法」(57a14-b6)

訳注

[7] (*ʔn*) *g mĩntĩn* は漢文の「乃至」に対応する。いくつかの例は *angmĩntĩn* (Suv 508-11 ; Suv 539-9) のように結合して書かれる。クローソンは *angmatĩn* ‘inadvertently’ (くかつにも) の誤写とみた (ED 186b-187a : *angmĩn*)。しかし実例は接続詞的用法にみえる。直訳は〈まずこれより〉か、〈そして、また、あるいは〉などに近い強調的接続辞とみたい。下記の接続辞(下線)と副詞句(波線)の例を参考としたい。Suv 508(Ⅷ6b)-11 :

- (5) *ũsdun turdačĩ tngri-läriḡ* :
- (6) *öng alqĩnču-sĩ orun-ta* : *uladı*
- (7) *käsĩḡčä* *šudavaz* : *arıy yir-tä*
- (8) *turdačĩ-larıy* : *uluy aźrua*
- (9) *buryuq-larĩn ymä birgärü* : *ančulayu*
- (10) *oq galısız* : *aźrua quvray-ĩ*
- (11) *tngri-läriḡ* : *angmĩntĩn* *kingürü*
- (12) *üč ming yirtinčü ičintäki* :
- (13) *sav atly lokařadı* : *yirtinčü*

(14) *yir suv iyä-sin : taqı ymä*

(15) *birläki : tirinin quvray-in barča-*

(16) *-ñı : ol qamay tngri-läriğ :*

(17) *alqu-nı barča ötünürmn :*

訳：(5)上にとどまる諸天を、(6)「色の究極」所などと(7)順番にしたがい浄居天(Skt. *śuddhāvāsa*)の地にとどまるものを、大梵天の補佐(9)役を、また一方、同じく(10)残りなく、梵衆の(11)諸天を、まずこれより広く、(12)三千世界のなかで(13)娑婆(Skt. *sahā*)と名づける世間(世界(14)地水)の主を、さらにまた、(15)共同の、群衆をすべて(16)を、そのすべての諸天を、(17)すべてをみな、私は請い願うものである。

漢文：上従色究竟，及以浄居天，大梵及梵輔，一切梵王衆，乃至遍三千，索訶世界主，并及諸眷属，我今皆請召。(T. 16, No. 665, p. 438b)

[15] *antay ärsär*〈そのようなとは、以下のようにとは〉、*ärsär*〈あるならば〉(条件法)は、軽い疑問詞的用法であろう。

[18] *üningä ägzigingä*〈音声によって〉：cf. BTT I, p. 54; BTT V, p. 47(393); BTT VIII, p. 126(ägsig).

[22] *kim qayu tınhlarta...* [31]... *ärsär*〈…(した)ところの人びとであるならば〉、*kim*は関係代名詞的用法であろう。

[21]～[31]は漢文「若有国土衆生，應以佛身得度者」に対応するが、注釈的敷衍により、大乘菩薩十地(織田仏辞 923-924)、十行(同上 908b)、住定の菩薩(総合仏辞 636c)などに参照される菩薩道が引用される。

[23] *on törlüg ornay-lar*〈十種の地所〉「十地」

[24] *on törlüg yoriy-lar*〈十種の修行〉「十行」

[25] *on törlüg buyan ävirmäk-lär*〈十種の福德回向〉

[27] *säkiz bilig*〈八識〉「八識」(唯識論)

[28] *tört bilgä bilig*〈四つの賢い知識〉「四智」

[28] *üç ät'öz adırtı*〈三身の区別〉「分別三身」

[30] *burxan-lar körügi*〈諸仏の照覧(?)〉

körügi〈照覧(?)〉は確かでない。突厥碑文では‘observer, spy’(ED 741)の意味で見られる。そのほかトルコ語「八陽経」ロンドン写本の識語に突厥文字で同一の語形がみえる(cf. 森安 1985b : 31)。

[34, 37] *pratikanbut* は「辟支佛」に対する訳であるが、Skt. *pratyekabuddha*(縁覚)と

Skt. sambodha(等覚)を結合させた独自の用語であろうか(対照辞典 1434b 参照)。

[40-41] *ämğäk*〈苦しみ〉, *tirgin*〈集まり〉, *öçmāk*〈滅ぼすこと〉, *yol*〈道〉, すなわち苦・集・滅・道の四聖諦をいう。s(*ap*)*š*ik〈適合した〉の語はツィーメ氏によって新しい見解が示されている [Zieme 1989a : 243] (cf. DTS 485b : *sapsi*)。

[51] 帝釈天は三十三天の天主であるが, 金光明経のトルコ語本にも *tngrī xanī xormuzta tngri* 〈天王ホルムズタ天〉 (Suv 132-17, 18) と訳されている。ただ浄居天 (Skt. śuddhāvāsa) との直接的関係はないので, *šudavas tngri yirintä* 〈浄居天の地に〉と復元する理由がなく, *süzük tngri yirintä* ならば, 第三十三番目の「清浄天」を指すことになるが, 音写の一致に多少不安がある。

[56] *ađın-lar blgürtmäsi üzä ärksindäci* 〈他のものらを変化せしめることによって支配する天〉は「他化自在天」の直訳で, 金光明経に以下の訳例がある。

Suv 508 (VIII 6b)-21, 22 :

(Suv 508-21) *ađın-lar* (22) *blgürtmäki üzä ärksintäci* : (23) *atly az ärigdä blgürtgä-* (509-1) *-li sävig-lig : ađaq asraqi* (2) *orun-ta* :

訳 : 他のもものらを変化せしめることによって支配するもの, と名づける悪魔の住地に変化せしめるべき, 享樂の, 足下のところにおいて。

[66, 69] *sančanačayi* は「僧慎爾耶」, 漢訳「正了知」(金光明経) に対応するもの。大正16, p. 441の注に *sañjaya* (*sañciñjaya*) (10) ; *sañciñjaya* (16), 対照辞典(1390a)に *sañjñeya* とする。ラドロフ (Suv 535 VIII 22a19-22) は, 下記のように, *sančanačavi* と読み, クローソンは *kančanačavi* (ED 237a) と読みかえたが, 正しくない。

金光明経の漢文「何故我名正了知, 此之因縁」(T. 16, No. 665, p. 441b10) に対するラドロフ本 :

(19) *nä avnt* (=avant) *tültay üzä mäning*

(20) *sančanačavi köni-sinčä biltäci tip*

(21) *ađanu täginmiş uyur-ın siz*

(22) *kntü tükäl bilü yrlıqayur siz* :

訳 : (19) 何の因縁によって, 私が (20) *sančanačavi* (= *sančanačayi*), “正しさによって知るもの” と (21) 名づけられるにいたったか, その理由を汝は (22) 自身つぶさに知りたもうや。

内容の注釈

[35] *iki ygrmi bölüklüg tiltay*〈十二部の因縁〉, すなわち十二因縁は辟支仏の觀門であるところからこの説明がなされたとみられる(織田仏辞 930a 参照)。

[40-41] 「苦集滅道」の四諦は声聞乗の人が觀ずることができるところから, ここに説明がなされたに違いない(織田仏辞 296a 参照)。

[46] 梵天は色界の初禪天であるから, この説明が加えられたとみられる(織田仏辞 1637ab 参照)。

[56] 他化自在天(Skt. *paranirmita-vaśa-vartin*)は欲界(六欲天)の第六で, 他のものがこしらえた樂境を奪って自在に享樂するという。

[66] 「天大將軍」が「僧慎爾耶藥叉大將」(漢訳「正了知大將」: 金光明經)に結びつけられたのは, 金光明經トルコ語本(Suv583, VIII-21b2-7)を引用したからではなかろうか。

Suv583 (VIII, 21b) - (7) ol öṭün (8) sančanačavi (*sic*) atly tngri-lär (9) orungatī (*sic*) säkiz otuz bay tngri- (10) -lär ärklig-läri birlä uluy (11) tirin quvray arasin-ta yomyı (12) olurmış orun-ları-tin örü (13) turup :

訳: その時に, サンチャナチャイと名づける諸天の大將は, 二十八姓の諸天の有力者とともに, 大群集の間であって, みな座席から起きあがった。

「爾時僧慎爾耶藥叉大將, 并与二十八部衆藥叉諸神, 於大衆中, 皆從座起」

(T. 16, No. 665, p. 441a)

略記と参考文献

Erdal, M.

1979 The Chronological Classification of Old Turkish Texts, *CAJ* XXIII - 3 / 4.

Hamilton, J.

1986 *Manuscripts ouïgours du IX^e-X^e siècle de Touen-Houang* I, II, Paris.

羽田 明

1971 岩波講座『世界歴史』6「ソグド人の東方活動」.

羽田 亨

1958 回鶻文法華經普門品の断片, 『東洋学報』5 - 3 (1914): 『羽田博士史学論文集』下巻 143-147 所収.

Hazai, G.

1970 Buddhistisches Gedicht aus der Berliner Turfan-sammlung, *AOH* 23(1).

Laut, J. P.

1986 *Der frühe türkische Buddhismus und seine literarischen Denkmäler*, Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica Band 21, Wiesbaden.

Maue, D. -Röhrborn, K.

1980 Zur alttürkischen Version des Saddharmapundarika-sūtra, *CAJ* XXIV(3/4).

森安孝夫

1985a チベット文字で書かれたウイグル文仏教教理問答(P. t. 1292)の研究, 『大阪大学文学部紀要』25.

1985b ウイグル語文献, 『講座敦煌6, 敦煌胡語文献』(山口瑞鳳編), 大東出版社.

1989 トルコ仏教の源流とトルコ語仏典の出現, 『史学雑誌』98(4).

Müller, F. W. K.

1910 *Uigurica II*, *APAW* 1910, Nr. 3, 14-20, 99.

Oda, J.

1983 Remarks on the Indic “lehngut” of the Säkiz yükmäk yaruq sūtra, *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*, Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica Band 16, Wiesbaden.

小田壽典

1984 1330年の雲南遠征余談, 『内陸アジア史研究』創刊号.

1986 偽経本天地八陽神呪経の伝播とテキスト, 『豊橋短期大学研究紀要』3.

1990 初期トルコ語仏典の年代に関する課題, 『豊橋短期大学研究紀要』7.

Radloff, W.

1911 *Kuan-ši-im Pusar*. Eine türkische Übersetzung des XXV. Kapitels der chinesischen Ausgabe des Saddharmapundarika, *Bibliotheca Buddhica* XIIIV, St. -Petersbourg.

Röhrborn, K.

1971 *Eine uigurische Totenmesse*, Berliner Turfantexte II, Berlin.

庄垣内正弘

1978 “古ウイグル語”におけるインド来源借用語彙の導入経路について, 『アジア・アフリカ言語文化研究』15(別冊), 東京外国語大学.

橘 瑞超

1913 ウイグル訳法華経提婆達多品, 『二葉叢書』4.

Tekin, Şinasi

1960 *Kuañşi İm Pusar (Ses İñiten İlah)*, Uygurca Metinler I, Atatürk Üniversitesi Yayınları No. 2, Erzurum.

吉田 豊

1987 漢訳マニ教文献における漢字音写された中世イラン語について(上),『外国学研究』XVII.

1989 ソグド語雑録(II),『オリエント』32(2).

Zieme, P.

1989a Die Vorrede zum alttürkischen Goldglanz-Sūtra von 1022, *Journal of Turkish Studies* (Harvard University) 13, 237-243.

1989b Zwei neue alttürkische *Saddharmapundarika*-Fragmente, *Altorientalische Forschungen* 16-2, Berlin.